

東京シンフォニエッタ

第42回
定期演奏会

サイモン・ホルト
Lilith (1990)

黒田 崇宏
There are (2016)
第37回入野賞受賞
世界初演



オスカー・ベティソン
Vamp (2004)

ヴィキンタス・バルタカス
Redditio (2010)
日本初演

©Eric MANAS

知られざる佳曲、様々な美学の交錯

2017.12.7 [Thu]
19:00 開演

東京文化会館 小ホール
全席自由：一般 4,000円 学生 2,000円

[出演] 指揮：板倉康明 東京シンフォニエッタ ※出演者、曲目は予告なしに変更になる場合がございます。

主催：一般社団法人 東京シンフォニエッタ 助成：芸術文化振興基金 / 公益財団法人 花王 芸術・科学財団 制作協力：東京コンサーツ

知られざる佳曲、様々な美学の交錯

2017.12.7 [Thu]
18:30 開場 19:00 開演
東京文化会館 小ホール

ごあいさつ

東京シンフォニエッタ音楽監督 板倉 康明

今回は我が国では未だ知られていない作曲家の作品と入野賞受賞作品でプログラムを組みました。音楽・現代音楽の作曲家に限っても世界は果てしなく広く、さまざまな美学を網羅的に日本で紹介しきれものではありません。もちろん国内においても同じ事が言えます。私たちは、演奏団体として、特定の楽派、音楽的志向に偏ることなく、作曲家自身のさまざまな立場、哲学を、自分の深奥からの声として楽譜に定着している作品を常に探しています。それと同時に演奏する事に「愉しみ、悦び」を見出せることも重要と考えています。古今のいわゆる名作と言われている作品は、仮に全体像が見えていない時期に於いてもパート譜を練習しているだけで期待感に溢れてくるものばかりです。今回の選曲でもそのような作品を集めました。

昨今ではインターネット上でたくさんの新しい作品、いわゆる「音源」を聞くことが簡単になったとはいえ、やはり実演＝演奏会で皆さんと作品を共有して、会場のその空気を共に感じて参りたいと思っております。

2016年に入野賞を受賞した邦人作品をはじめそれぞれの作品の持つ魅力、演奏する東京シンフォニエッタの知られざる魅力もあわせてお楽しみ頂きたい存じます。



写真 © 堀田力丸

発売開始：9月25日 [Mon]

チケット取り扱い

- 東京コンサート (問合せ先)
03-3200-9755 (平日 10:00-18:00)
<http://www.tokyo-concerts.co.jp>
- 東京文化会館チケットサービス
03-5685-0650 (10:00-19:00 休館日を除く)
<http://www.t-bunka.jp/>

アクセス

- JR 上野駅、公園口 すぐ
(京浜東北線、常磐・成田線、常盤線、高崎線、東北本線、山手線)
- 東京メトロ 上野駅 7番出口
(銀座線、日比谷線) 徒歩5分
- 京成上野駅、公園口 (京成線) 徒歩5分



〒110-8716 東京都台東区上野公園5-45
TEL 03-3828-2111

次回定期演奏会の予告

第43回定期演奏会 Music From Japan in TOKYO

2018年7月7日 [Sat] 18:00 開演
東京文化会館 小ホール

指揮：板倉 康明 東京シンフォニエッタ

- ◆ ジュリア・ウルフ
- ◆ アンソニー・チャン
- ◆ 酒井健治
- ◆ 新実徳英

※出演者、曲目は予告なしに変更になる場合がございます。

黒田 崇宏 (1989-)

2014年、東京藝術大学音楽学部作曲科を卒業。2017年、同大学大学院音楽研究科修士課程作曲専攻を修了。これまでに作曲を井元透馬、松下功、福士則夫、近藤謙、鈴木純明の各氏に師事。第29回現音作曲新人賞(2012年)、第37回入野賞(2016年)を受賞。



サイモン・ホルト (1958-)

イギリス生まれ。王立北部音楽学校卒業後、現代音楽の分野で活動の基盤を固め、ロンドン・シンフォニエッタやナッシュ・アンサンブルから数々の委嘱を受け、実り多い共同作業を行う。メシアン、クセナキス、フェルドマンのみならず、ゴヤ、ジャコモッティ、ブランクーシらの視覚芸術からも影響を受けたホルトの音楽は、複雑かつドラマティックであり、ときに謎めいている。その作品は、表面的には直情的だが、緻密な内的構造によって支えられている。1980年代には、もっぱら複雑な音響世界を展開していたが、1990年代以降、密度の濃いテクスチャはしばしば姿を消し、代わってフェルドマン的な静寂の瞬間が現れるようになった。ホルトはこれを「静かな中心」と呼んでいる。2008～2014年にBBCウェールズ・ナショナル管弦楽団のコンポーザー・イン・アソシエーション(提携作曲家)を務め、在任中に《釜に入った聖ヴィトゥス》、《ケンタウロスの戦い》、《黄色い壁紙》、《モルフェウスが目覚める》など数々の管弦楽のための作品で好評を博した。



© Andrzej Urbaniak

ヴィキントス・バルタカス (1972-)

リトアニアの首都ヴィリニウスに生まれ、ヴィリニウス音楽アカデミーを経てカールスルーエ音楽大学でヴォルフガング・リームに作曲を師事。1994～1996年にダルムシュタット夏季国際現代音楽講習会、1998年にパリ国立高等音楽院でエマニュエル・ヌネスに学び、1999～2000年に IRCAM の講習を受ける。1995年以降ペーテル・エトヴェシュのアシスタントを務めた。2000年以降からドイツを中心として作品が演奏されるようになり、2003年にはクラウド・オ・アバド国際作曲賞受賞。2008年以降ダルムシュタットの講習会で作曲を教える。指揮活動も精力的に行い、2009年には現代音楽専門アンサンブル、リトアニア・アンサンブル・ネットワークを設立し指揮者、芸術監督を務める。主要作品には、クラングフォルム・ウィーンによって初演された《厚い雲を飲まんとし》(2003)、ミュンヘン・ビエンナーレで初演された室内オペラ《カントイオ》(2004)、ベルリン音楽祭で初演された《ブストラ》(2006)などがある。



© Andrzej Urbaniak

オスカー・ベティソン (1975-)

イギリス生まれ。英国王立音楽院でサイモン・ペインブリッジ、ハーグ王立音楽院(オランダ)でレイ・アンドリーセンとマーティン・パディングに師事。第1回BBCヤング・コンポーザー・オヴ・ザ・イヤー賞(1993)、ロイヤル・フィルハーモニー協会賞(1997)を受賞。「シンデレラ楽器」という名のもとに、楽器を制作しない再想像したり、ロックで一般的に用いられる楽器を用いたり電子音響を採り入れるなどしており、近作ではこれらの要素を総合している。「型破りな抒情性と恐ろしいほどの美しさ」(ニューヨーク公共ラジオ「サウンドチェック」)を特徴とするその音楽は、ロサンゼルス・フィルハーモニックやムジックファブリックなど、世界各国のアンサンブルによって委嘱、演奏されている。演奏時間約50分におよぶ自作《オー・デス》を収録した同名のCDは、オランダとアメリカのメディアで絶賛された。2015年には、新作の弦楽四重奏曲がタンゲルウッド現代音楽祭で初演されている。2008年、プリンストン大学で博士号取得。現在、ジョンズ・ホプキンス大学のピーボディ音楽院で作曲を教えている。



© Sarah Bettison